

東院南方遺跡の調査

—第434次

1 調査の概要

調査地 調査地は、平城京左京二条二坊五坪の西南部にあたり(図198)、およそ12m東を、1988年に奈良市教育委員会が調査している(奈良市第156次調査)。平城第193次B区・第198次・第200次・第204次調査で出土したいわゆる二条大路木簡の内容から、左京二条二坊五坪には藤原麻呂邸が存在した可能性が指摘されており(奈文研『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』1995年)、周辺で行われた調査成果からも、奈良時代に属する遺構が濃密に存在すると推測された。

地形と基本層序 調査地の東には菰川が南流し、周辺は現在耕作地ないし商業地として利用されている。調査地の基本層序は、現地表面から、駐車場のクラッシャー(約40cm)、駐車場に伴う造成盛土(約50cm)があり、旧耕土(約15cm)、黄灰色土(いわゆる床土2層、約25cm)、奈良時代の遺物を大量に含む暗褐色砂質土(約10cm)、灰色砂質土(いわゆる地山)と続き、その下には黄灰色・灰褐色ないし灰色の粘土が堆積する。遺構検出は、暗褐色砂質土で試みた後、灰色砂質土の地山面で再度行った。

2 遺構

検出した遺構は、掘立柱建物6棟、塀1条、溝2条、土坑1基、足場穴列3組などで、少なくとも6時期以上におよぶ遺構変遷を確認した(図199)。以下、時期の古いものから略述する。

奈良時代前半

A期 SB9183・SB9184 梁行2間の掘立柱の南北棟建物。柱間約2.7m(9尺)。梁行は、それぞれ調査区外北側、調査区外南側へ続き不詳。柱筋を揃えるため、同時期の建物と判断した。

B期 SB9185 東西方向に柱穴4基を検出した掘立柱建物。いずれも柱痕跡が残る。柱間約2.4m(8尺)。調査区外北側へ続くが、南北棟か東西棟か不詳。南北溝SD9182とは併存しない。また、A期の建物と同時に併存することはないが、その前後関係は不明で、時期が逆転する可能性は残る。

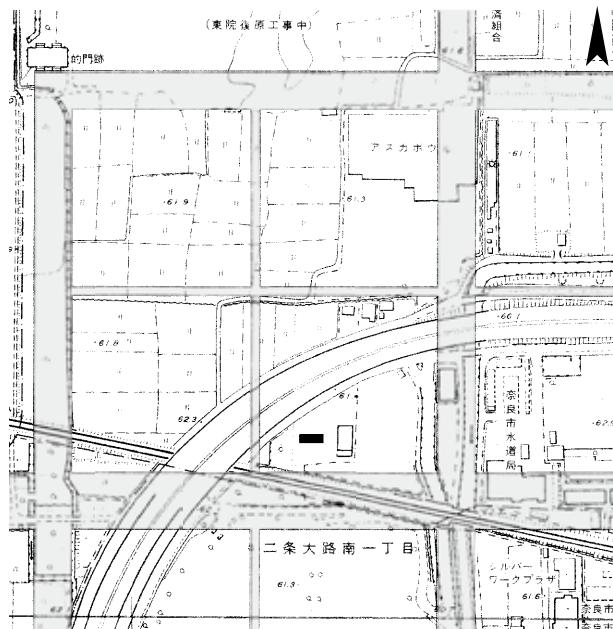


図 198 第434次調査区位置図 1:5000

奈良時代半ば

C期 SB9187 奈良市第156次調査で検出した東西棟建物SB5346の北柱列と筋を揃える柱列。掘立柱の東西棟建物となる柱穴であろう。柱間約3m(10尺)。今回の調査で検出した最も西端の柱穴は、既調査で検出した柱穴から約30m(100尺)西に位置する。SB5346は、上記報告書で奈良時代半ばのd期に属すると指摘されており、今回の調査の時期変遷を考える基点となった。

SS9188 SB9187の造営ないし解体に際して造られた足場穴列。2列で計7基の小柱穴を検出した。

奈良時代半ばから後半まで

D期 SA9180 柱間約3m(10尺)の掘立柱の南北塀。柱穴2基を検出し、さらに調査区外南北へ続く。

SD9181・SD9182 SA9180の東西で検出した素堀りの南北溝。SD9181は、幅約90cm、約2.7m分検出。残存する深さは最大で5cm程度。SD9182は、幅約80cm、深約10cmで調査区外南北へ続くと推測される。SA9180・SD9181・SD9182は、五坪の西半を2分する区画施設である可能性が高い。

SX9189・SX9190 1辺約1.4m、残存する深さ約90cmの柱穴。SX9189の柱穴から、礎板が出土した。大規模な南北棟建物の西廂の一部となる可能性もあるが不詳。

奈良時代後半から末まで

E期 SB9191 柱穴6基を検出し、うち3基の柱穴で礎板を検出した。検出面から5cm程度で穴の底になる浅い

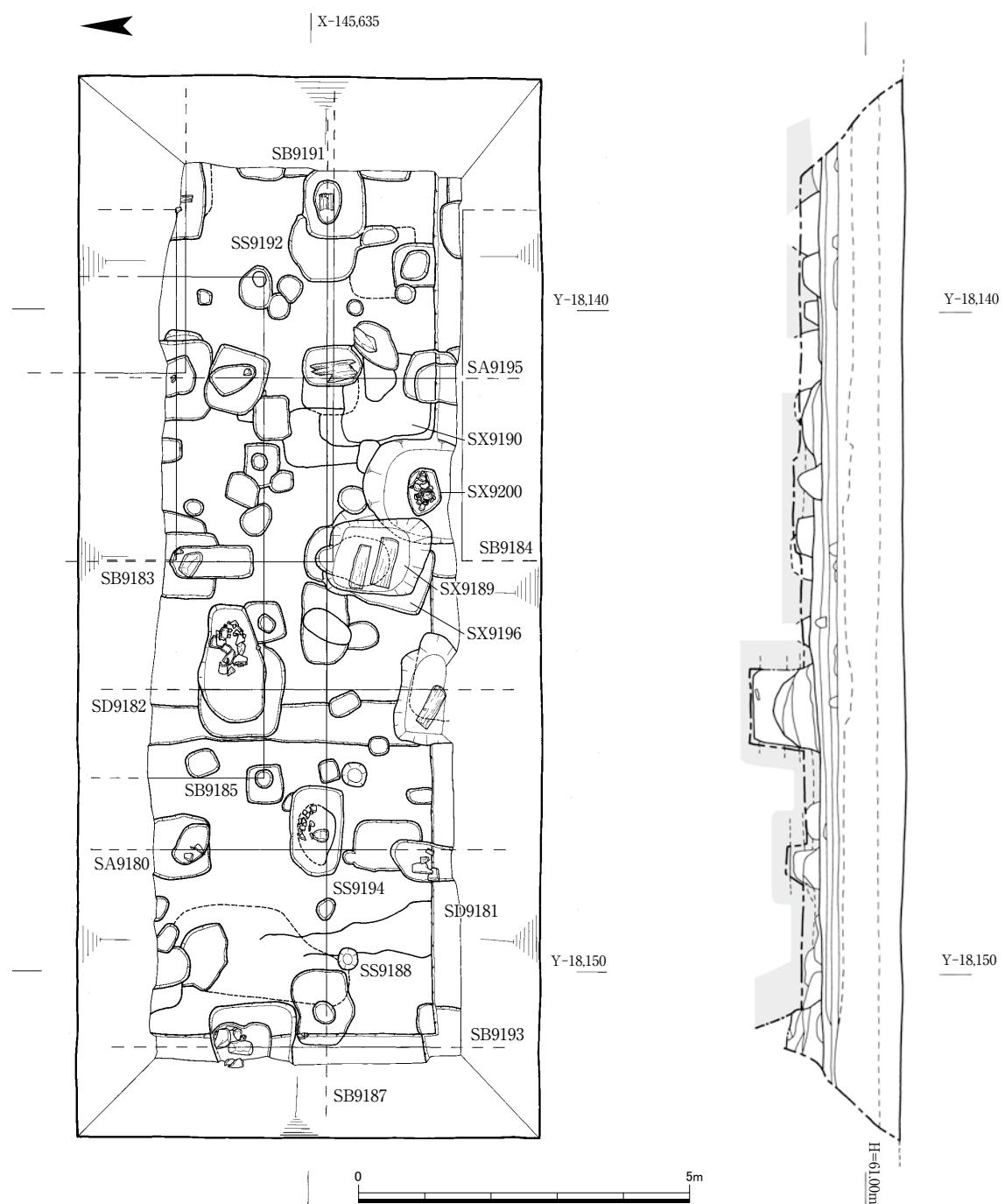


図 199 第 434 次調査遺構平面図・断面図 1:100

柱穴からなる建物。柱間約2.7m (9尺)。南・西に廂をもつ東西棟建物の西南隅もしくは、9尺等間の総柱建物となる可能性がある。重複関係から、SB9183・SB9187より新しく、SA9195に先行する。

SS9192 SB9191の造営ないし解体に際して造られた足場穴列。2列で計3基の小柱穴を検出した。
F期 SB9193 梁行2間、桁行不詳の掘立柱の南北棟建物。柱間は、桁行約3m (10尺)、梁行約2.7m (9尺)。

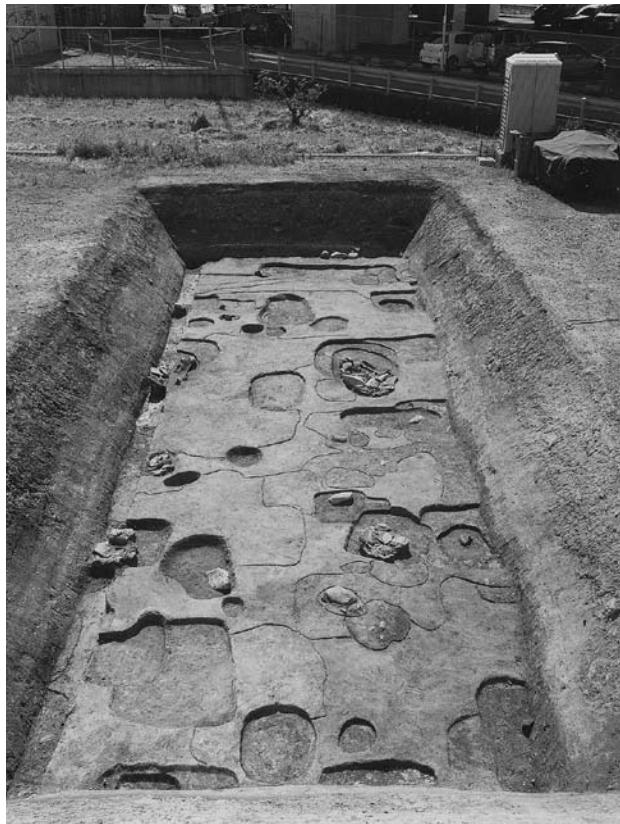


図200 第434次調査区全景(東から)

1 迂約1.2m、残存する深さ約1mの柱穴をもち、抜取穴に大量の瓦・土器を含む。検出した4基の柱穴のうち、北西・南東の柱穴に礎板が残存していた(後述)。SA9195と同時期である可能性が高い。

SS9194 SB9193の造営ないし解体に際して造られた足場穴列。2列で計3基の小柱穴を検出した。

SA9195 SB9193の東約4.5m(15尺)に位置する南北堀。柱間約3m(10尺)。調査区外南北へ続くと推測される。

時期不詳の遺構

SK9196 長径約2m、短径約1.5m、残存する深さ約30cmの不整形の土坑。

SX9200 土器埋納遺構。須恵器蓋・土師器皿・須恵器杯で少なくとも三重に覆った土師器甕が埋められた穴。他の遺構との明確な重複関係はないものの、SK9196およびSX9200は、SB9187を覆う暗褐色砂質土の面で検出したため、奈良時代後半以降の遺構と推測できる。(山本 崇)

3 遺 物

出土遺物は、土器、瓦磚類、建築部材・礎板等である。

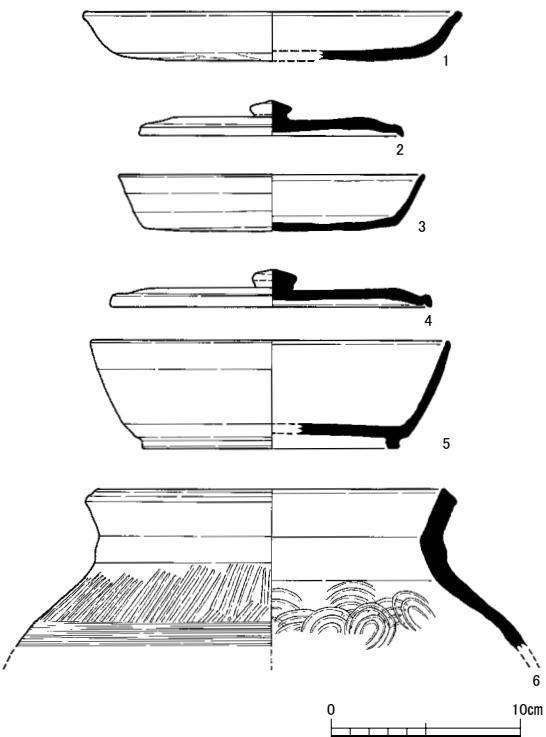


図201 第434次調査出土土器 1:4

以下、遺物ごとに報告する。

土 器 第434次調査で出土した土器は、整理箱で6箱である。全体に細片が多く、図示できるものは少ない(図201)。

SX9200の土器は須恵器杯A 2個体、同杯B蓋 2個体、土師器皿A 2個体、土師器甕1個体、土師器椀A 1個体からなる。これらはSX9200内に折り重なっていた土器で、おそらく一括廃棄されたものであろう。このうち、須恵器杯A 1個体と土師器椀Aは倒立した土師器甕の内側におさまっていたもので、どちらも伏せた状態で出土。残余はこれらより上位で出土している。土師器および須恵器杯Aは保存状態がわるい。

1は土師器皿A。底部外面をヘラケズリで整える(b0)が、中央付近に指頭圧痕のくぼみが消えずに残る。底部外面には「×」印の線刻が、内面には交差する3条の線刻が認められる。同形の皿A片がほかに1個体あるが、本例と同一個体の可能性もある。2は須恵器杯B蓋で、完形に復したもの。扁平で頂部中央がややくぼんでいる。3は須恵器皿Aで、底部外面をヘラケズリで整え、口縁部には重ね焼き痕を残す。このほか、図示は困難だが、土師器椀Aは器表面にヘラミガキを施したもの。土師器甕Aは細片化しているが、球胴形の体部をもつ。これら8個体の土器は、いずれも平城宮土器IV～Vに属する。



図202 SB9193柱抜取穴出土軒瓦 1:4

図201-4~6はSB9193の柱抜取穴から出土した須恵器で、奈良時代後半に属するとみられる。4は杯B蓋で、ほぼ平坦な頂部につまみを貼りつけている。5は杯B。底部外面および口縁部の底部付近にロクロケズリの痕跡を残し、底部外縁近くに高台を貼りつける。6は甕。胎土に径1~2mm大の砂粒・黒色粒子を含み、灰白色に焼きあがる。胴部外面には平行タタキ目および横方向のカキ目が、内面には当具痕が残る。短い頸部の内面には、胴部との接合痕が消えずに残っている。特徴ある器形であるが、産地は不明である。

第434次では、このほかにもSA9180・SX9189・SB9191の柱穴で土器片が出土しているが、いずれも細片で時期を明らかにしがたい。

(森川 実)

瓦磚類 本調査区から出土した瓦磚類は表26と図202に示した。全体に平城還都後の瓦が多い。出土数が少なく各建物の所用瓦を推測することはできない。

SB9193の柱穴から出土した瓦の種類は豊富である。柱穴掘方からは軒丸瓦6282E、抜取穴からは軒丸瓦6235B・6304、軒平瓦6663H・6682A・6702Aが出土した。SA9180の柱穴からは軒丸瓦6134A・6313A、柱穴掘方から6235B、柱抜取穴からは軒平瓦6763Aが出土した。

出土した瓦のうちもっとも新しい年代の瓦から各遺構の上限を示すと、SB9193の柱穴掘方は平城還都後の天平末年頃、柱抜取穴は天平宝字年間から天平神護年間頃まで(757~767)となる。SA9180の柱穴掘形は天平宝字年間から天平神護年間頃まで、抜取穴は神護景雲年間頃(767~770)となる。

(今井晃樹)

部材 柱穴の礎板のうち、SB9193の北西の柱穴から出土した礎板は、その形状から斗を転用したものと推定される(図203)。材は4個あり、底面、斗縁、木口、敷面、底面太柄穴が確認できる。部材より確実に得られる寸法は、斗尻幅(底面の幅)326mm、全幅(最も広い部分)482mm、斗縁上面から敷面まで89mmである。その大きさから判断

表26 第434次調査出土瓦磚類集計表

| 型式 | 軒丸瓦 | | 軒平瓦 | | 道具瓦 | | |
|------|-----|--------|------|---------|--------|-------|----|
| | 種 | 点数 | 型式 | 種 | 点数 | 種類 | 点数 |
| 6134 | A | 1 | 6663 | A | 1 | 鬼瓦 | 1 |
| 6235 | B | 7 | | B | 1 | | |
| | ? | 2 | | F | 1 | | |
| 6282 | E | 1 | | H | 1 | | |
| 6304 | ? | 1 | 6664 | D | 1 | | |
| 6313 | A | 1 | 6682 | A | 1 | | |
| 軒丸瓦 | | 2 | 6702 | A | 3 | | |
| | | | 6763 | A | 1 | | |
| | | | 新型式 | | 1 | | |
| | | | 軒平瓦 | | 4 | | |
| 軒丸瓦計 | | 15 | 軒平瓦計 | | 15 | 道具瓦計 | 1 |
| | 丸瓦 | | 平瓦 | | 磚 | 凝灰岩 | |
| 重量 | | 81.4kg | | 147.2kg | 13.8kg | 0.2kg | |
| 点数 | | 452 | | 1479 | 17 | 1 | |

して、大斗であったと考えられる。(島田敏男)

年輪年代調査 調査の対象としたのは、SB9193北西の柱穴から出土した礎板に転用した大斗4点、同建物南東の柱穴から出土した礎板1点、SX9189から出土した礎板2点の7点である。



図203 出土礎板(下)

光学顕微鏡で木材組織の解剖学的な特徴を観察したところ、樹種はいずれもヒノキであった。高解像度のデジタルカメラで撮影した調査対象の年輪画像をコンピュータで画像計測する方法で年輪年代調査を実施したが、調査対象の年輪幅データとヒノキの曆年標準パターンとの間で統計的に有意な照合成立を認めることができなかつた。したがって年輪年代については、いずれも不明である。

(大河内隆之)

4 まとめ

左京二条二坊五坪におけるこれまでの調査成果によると、遺構の変遷は7時期に区分され、奈良時代を通じて基本的に少なくとも1坪全体を一つの敷地として利用していたと指摘されている。本調査では、前述の如く少なくとも6時期の遺構を検出し、奈良時代半ばから後半にかけての頃、五坪内を計画的に区画する堀および溝が造られたことを明らかにした。この区画施設は、坪の中心部分に内郭を形成するものと推測され、五坪における敷地利用の変遷が窺われるものとして重要である。

今回の調査により、いわゆる東院南方遺跡が、重要な遺構および遺物の包蔵地であることをあらためて確認できたといえ、今後とも、継続的な調査と調査成果の蓄積・整理に努める必要がある。

(山本)